校長室だより～燦燦～ №９７８

人の心

2024.2.21

計算してみた。教員になり最初に担任した子どもたちは、４０代半ばになっている。みんな瞳がきらきらしていた。元気いっぱいだった。子どもらしい子どもたちだった。多少のことではへこたれないような強さもあった。

あの頃は、毎日くたくただった。まさに体力勝負だった。小学校は、ほぼ全教科の授業を担任の先生が担当する。音楽の授業をやっていたのだから自分でも信じられない。空き時間など、ほとんどなかった。休み時間もなかった。校庭で子どもたちと遊んでいた。放課後になると、サッカーの指導があった。子どもたちが家路につき、ようやくホッとできる時間となる。ここからが仕事である。明日の授業の準備もある。授業に必要なものを買うために、隣の市まで車をとばすこともあった。一日一日が、精一杯だった。

土曜日の午後も、サッカーの練習があった。練習試合に出かけることもあった。日曜日になり、ようやくゆっくりできるかと思いきや、朝から教員住宅に襲撃者がやってくる。子どもたちである。というわけで、子どもたちとずっと一緒だった。

いつぞやは、どこからか、子どもたちが犬を連れてきた。どうやら、飼い犬ではないらしい。教員住宅で飼えという。仕方なく飼うこととなった。それが果たして犬にとってよかったのかどうかはわからない。とにかくエネルギッシュかつバイタリティのある子どもたちだった。

そんな子どもたちも、別人のようになることがある。家庭訪問である。まるで借りてきた猫である。おとなしく座っている。初めての土地で、目的地までたどり着けるかという不安があった。だが、何の心配もいらなかった。行くところ、行くところ、子どもたちが待ち構えていて、ちゃんと家まで誘導してくれるのである。その表情がうれしそうである。得意気である。ところが、親の前ではおとなしくなるからおもしろい。

何もわからず不安感しか抱かせるものがない私のような若造に、保護者をはじめ地域の皆さんは、とてもよくしてくれた。何もできなかったが、皆さんの心だけは受け取っていた。おかげで、どうにかこうにか、今日まで教員を続けられている。もしかしたら、教員になり、最初のうちに、最も大切なものを受け取っていたのかもしれない。それが人の心である。

その後、３０年以上もの間、教員を続けることになったが、いつも人の心だけは大切にしてきたような気がする。だからと言って、うまくできてきたわけではない。人を傷つけてしまったことがある。人の気持ちがわからず失敗したこともある。それでも、人の心とともに、生きてきたように思う。私にとっては、宝物のような子どもたちも、４０代半ば、人生の折り返し地点にさしかかっている。みんな、どんな大人になったのだろうか。機会があったら、ぜひ会ってみたい。